❖観察記録から❖

砂場で使った木片を水道で洗っていたTaは、水が木片に弾き跳ねると喚声を上げた。蛇口をひねり、もっと強く水を出す。水は木片にあたり、ガラスの幕をつくる。顔も服もビチョビチョに濡らし、一人有頂天になって遊んでいるところに、H先生が通りがかった。

H先生がTaに言う。「あら！　どうも水道屋さんから電話がかかってくると思ったわ。水道屋さんは、どこかで水を無駄使いしていませんかって…。先生知らなかったけど、ここだったのね。Ta君、たのみますよ。」

Taは、はっとして水を細め、「これくらい？」と聞く。先生は「あら、おじょうずね」と言い、去っていった。

＊　＊　＊

◇歌壇から◇

凍解の牧場へ牛の追われ行く
　はや春の陽の光る柵道　（原博巳）

生ぬるき牛の鼻輪に手を触れて
　児らの喚声しばし野にあり　（蓑島勇）

卓を匍う羽虫いとおし
　小さき翅に春を負い来しごと思われて　（深谷宗二郎）

こつこつと三人の子が茹で玉子
　割る音たのし朝のテーブル　（青山千春）

おばあちゃま大好きと言い
　柔かき頬をすり寄す泪流るる　（汐谷須美子）

背にねむる幼なの握る紙袋の
　膨らみのなか胡蝶のうごく　（斎藤絢子）